

バッカーズファンデーション / AIT
レジデンスプログラム(The BAR)vol.15
活動報告書　　平松可南子

訪問した美術館・博物館など　全６３ヶ所

9/4~10/6　約一ヶ月間



- ホンデ（韓国）9.4~9.5
- フランクフルト(ドイツ) 9.5~9.6
  - ・シュテーデル美術館
  - ・ギャラリー
  - ・フランクフルト大聖堂
- パリ(フランス)9.6~9.11
  - ・ポンピドゥーセンター
  - ・パンテオン
  - ・アラブ世界研究所
  - ・ムスクドゥパリ
  - ・オルセー美術館
  - ・凱旋門
  - ・サントシャペル
  - ・ルーブル美術館
  - ・モン・サン・ミシェル
  - ・カルティエ現代美術財団
  - ・クリニャンクール蚤の市
  - ・ヴァンブ蚤の市
  - ・エッフェル塔
  - ・コンシェルジュリー
  - ・パリ国立自然史博物館(古生物・比較解剖陳列館)
  - ・パリ国立自然史博物館(進化博物館)
- マルセイユ(フランス)9.11,9.12
  - ・鏡の天井(ノーマンフォスター　英建築家)
  - ・コスケール洞窟　Cosquer Méditerranée
- エクス・アン・プロヴァンス(フランス)9.12~9.13
  - ・セザンヌのアトリエ
  - ・サントヴィクトワール山
- ニース9.13
  - ・マティス美術館
  - ・ロザリオ礼拝堂
- ロンドン(イギリス)9.14~9.16
  - ・大英博物館
  - ・ナショナル・ギャラリー
  - ・バッキンガム宮殿
  - ・テート・モダン
- ローマ(イタリア)9.16~9.19
  - ・コロッセオ(外)
  - ・ボルゲーゼ美術館
  - ・カピトリーノ美術館
  - ・トレビの泉
  - ・ローマ現代アート美術館　MACRO
  - ・ローマ国立近代美術館
- ヴァチカン市国9.18
  - ・ヴァチカン美術館
  - ・システィーナ礼拝堂
  - ・サンピエトロ寺院(外)
  - ・Piazza della Minerva
- ニース(フランス)9.19~9.21
  - ・マティス美術館(2回目)・シャガール美術館
  - ・ニース現代美術館(トゥ・バン・トラン)造形作家
  - ・マーグ財団美術館(リオペレ)
  - ・ロザリオ礼拝堂(2回目晴れ)
- トゥールーズ(フランス)9.21~9.23
  - ・ラスコーIV
  - ・ペシュメルル洞窟
- パリ(フランス)9.23~9.27
  - ・カタコンブ
  - ・ペロタンギャラリー他4つほど
- アムステルダム(オランダ)9.27~9.30
  - ・アムステルダム市立美術館Stedelijk Museum Amsterdam
  - ・ハイネケン工場
- コペンハーゲン(デンマーク)9.30~10.4
  - ・ルイジアナ美術館
  - ・Meatpacking District Kødbyen
  - ・V1 Gallery
  - ・Folkehuset Absalon
  - ・救世主教会
  - ・クリスチャニア
  - ・カステット要塞
  - ・人魚姫
  - ・GALLERI NICOLAI WALLNER
  - ・Nikolaj Art Gallery Nikolaj Kunsthal
- ウィーン(オーストリア)10.4~10.6
  - ・ベルヴェデーレ宮殿
  - ・ゼセッション
  - ・Stephansplatz

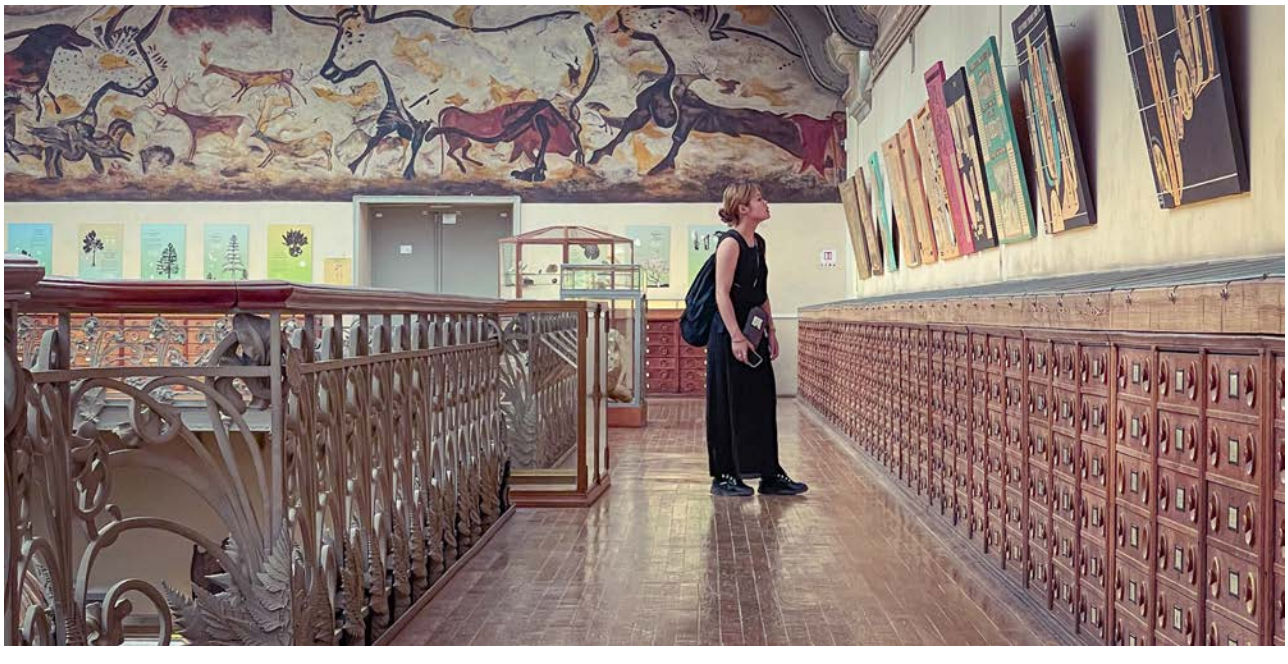
今回の旅の目的

––––洞窟壁画を実際に観にいく。

実際の場所を訪れ、徐々に時間が経つにつれて消えていってしまう、見ることができなくなってしまう絵画の起源たちを記憶/記録する。 ––––

ひとつの絵画の起源としての洞窟壁画をメインに調査を行う。
一般的に、絵画はできる限り永続的に残ることを自明の目的に絵の具や素材が作られ、作品自体も「残すこと」を前提としている。
洞窟絵画も同様に、残すことを意図していたのかもしれないが、それは現在の私たちの意識とは異なる部分があるように思う。
近年、保存の観点からそういった描いた痕跡のある場所には立ち入れなくなってきている一方、洞窟の特殊な環境によっては、描かれた瞬間よりも物質的に強度を増していくこともあるらしい。
実際の場所を訪れ、そのような徐々に時間が経つにつれて消えていってしまう、見ることができなくなってしまう絵画の起源たちを記憶/記録する。
その後、ヨーロッパの古典芸術から近代へと辿る変遷を見て、現代の自身の制作と、それらの絵画の違いについて考察したい。
そのような本プログラムのリサーチを通し、自分自身の制作や、絵画に対する考え方にどういった影響があるのかを見つめ直す。

今回の旅の中で非常に多くの場所を訪れたが、を報告書としては洞窟壁画を中心とした旅の記録を提出する。



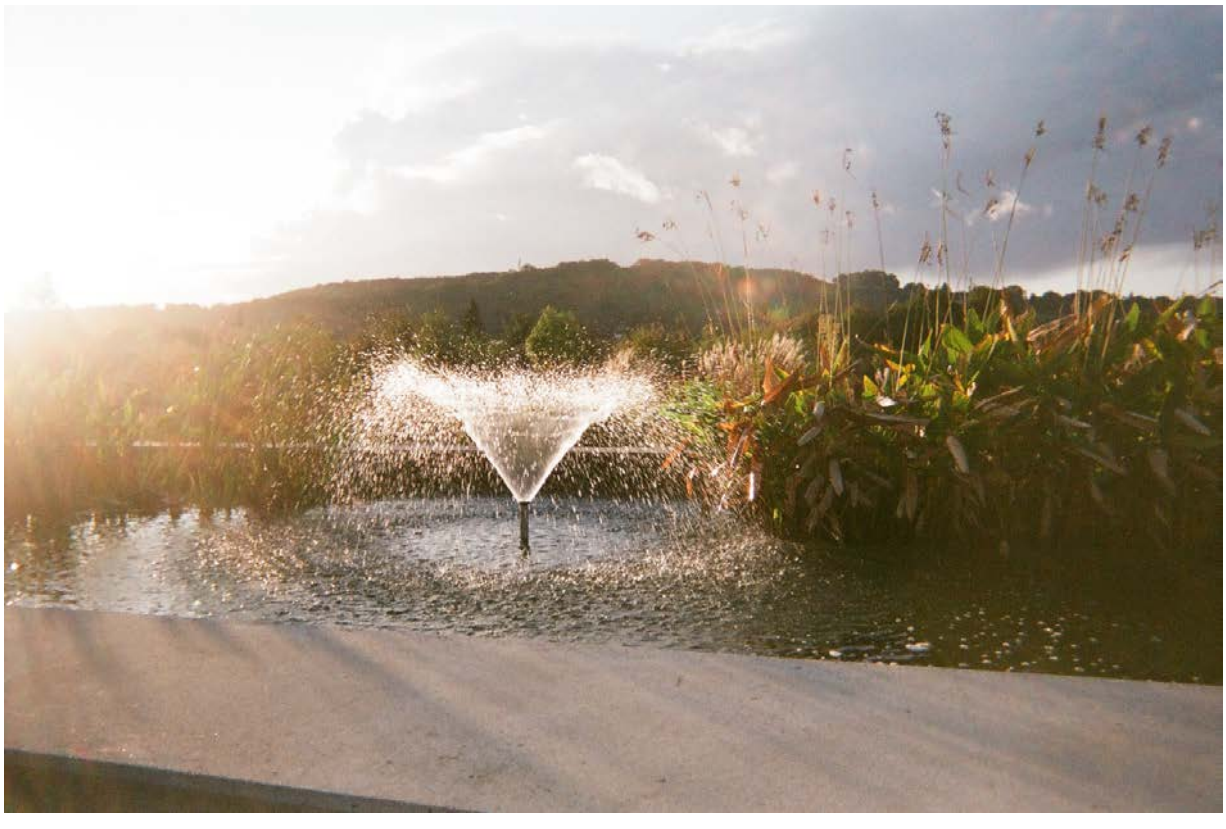
・今回の経験で得たもの
レジデンスプログラムでは、フランスを中心に１か月間に渡るリサーチをしに行った。

今回の旅の大きな目的である洞窟も見ることが出来た。ラスコー壁画、ペシュメルル洞窟、コスケール海底洞窟といった洞窟壁画を実際に訪れ、調査した。

洞窟壁画は近年、入場できる場所が減少している。
理由としては、自然物が故に地形が変化することで人が立ち入ることが危険だと判断されること、人が吐く二酸化炭素などで酸化してしまうこと、主には保管のためである。
フランスはまだ入場可能な場所が数箇所残っていて、今回の旅ではレプリカを２箇所、３万年前のクロマニョン人が書いた壁画を実際に１箇所見ることが出来た。

ペシュメルル洞窟で見た壁面にある半円型の岩は壁から溶けた石灰石（炭酸カルシウム）が岩の小さな亀裂の間から徐々に溶け出し、化学反応を繰り返して固まってゆく。
今にも上から落ちてきそうな円盤型の岩の塊は、今も成長し続けていた。
自然にできた多面体に描かれる大きな壁画。洞窟の表面が雨水と化学反応を起こすことで、劣化せずに強度を増していること。それは”常に動き続けている”状態と言えるだろう。

私が近年興味を持っている対象物の「蟻」という小さいものたちが作る巣の構造は、雨が降るたびに砂が中に入り、その砂をまた蟻たちが地上に持って行く。そして巣の周りには山ができる。
それは私の作品によく出てくるモチーフである、「噴水」の構造とどこか似ている循環のようなものがあると思っている。
さらに、私がそのアリと同じように地下に潜って行き、洞窟絵画を見て、現代において地上で作る絵は、違うようでどこか同じな気がしている。



コスケール洞窟　Villa Cosquer Méditerranée

マルセイユに2022年にできたVilla Cosquer Méditerranée。
1985年に海底で発見された洞窟、「コスケール洞窟」のレプリカが見ることができる。
洞窟壁画の中でも非常に稀であるペンギンの壁画が展示されている。１１種類の動物65個の手形、幾何学模様などを実際の洞窟と同じ感覚で乗り物に乗りながら見学することができる。
乗り物が360°回転し、洞窟全体を見回すことができる。
プロジェクションマッピングなども使われているため、英語の説明ガイドでも何が描かれているのかをわかりやすく見ることが出来た。

現在は海の下に潜っている洞窟が当時は地上にあったかもしれないこと。そしてペンギンの姿が発見されたことにより、当時のマルセイユにはペンギンがいたという裏付けになること。→



→また、自身の知っている壁画の中では牛や馬などの陸上動物のイメージを勝手に作り上げていたが、アザラシなどの海上生物の壁画もあることに改めて驚いた。
3万年前の徒歩や馬を使ってでしか移動ができなかった時代だからこそ、土地により描かれるものが違うという発見は興味深かった。





トンネル入口と海抜の断面図



◀左図下にある乗り物に乗って見学する。
お年寄りから子供まで楽しめるような、ゆっくりとした乗り物で実際の海の上を冒険しているような作り。
エンターテイメント性もあり面白かった。

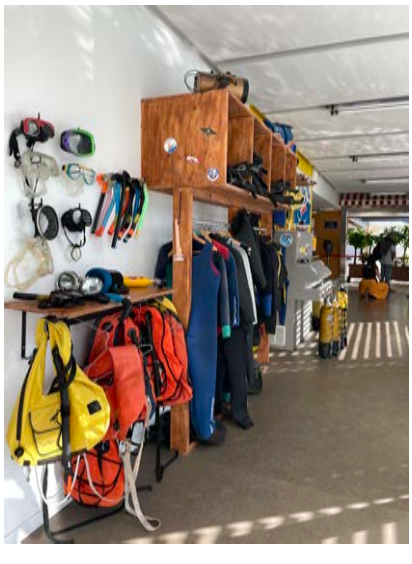
▶建物の外には当時コスケールが調査に使っていた船を模したものがあったり、地下までは係員からの説明がありダイビングの道具なども展示されていた。



▼実際のパンフレットの一部より抜粋
中はこのようになっていて撮影は禁止。







ラスコー洞窟　グロット・ド・ラスコー
LASCAUX

フランスの西南部にあるドルドーニュ県、ヴェゼール渓谷のモンテニャックの南東の丘の上に位置する洞窟。
現在洞窟は立ち入り禁止。今回はレプリカが展示されている「ラスコーⅣ」を見に行った。

館内はかなり近代的な作りになっていてプロジェクションマッピングと日本語ガイド付きのタブレットによる説明もあった。ラスコー洞窟は1940年9月14日に4人の少年たちによって発見された。「ラスコーⅣ」はこの少年たちの奮闘を追体験できるような構成になっている。
ラスコー洞窟壁画は1万8000年前に描かれたと考えられている。

当時の画家たちは遠近法を考えて描いていたのだという。近くで見ると歪な形だがある方向から見ると形が取れているということに感心した。

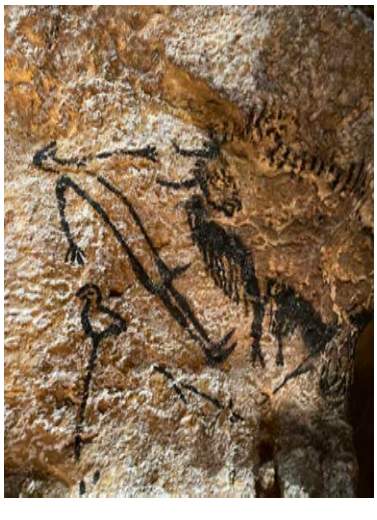
また描いている時期も違うということをプロジェクションマッピングによってわかりやすく解説していた。先人が描いた絵の上から別の時代を生きている人間が描くという行為は自分の絵を描く行為と似ていると感じた。











◀「井戸の場面」
鳥のような人間のようなものが描かれている。ある種の信仰から見られるように鳥はあの世からの使いなのか？ということが説明としてあった。この絵には色々な推測がされていて、近年天体図を表しているのではないかと言われている。

ペシュメルル洞窟　du Pech Merle
GRITTE et MUSEE

今回の旅で実際に入ることができた洞窟。
フランスのカオールから東に約32km離れたオクシタニア地方の山の奥にある。アクセスが悪いため平松はレンタカーにて車を運転して行った。
照明や保存の関係で写真撮影は禁止。見学できる時間も限られている。（43分間）

1922年9月4日にロット県カブルレ村の10代の子供3人により発見された。
ガイドに関してはフランス語と英語しかなかったが、日本語の紙の文章ガイドを渡してくれ、詳しく内容を知ることができた。

ショップの地下に洞窟の入り口があり見学者はそこから洞窟へ入る。
小規模ではあるが博物館も併設されている。

ペシュメルル洞窟を訪れる前に幾つかのレプリカを見たが、レプリカの精巧さに驚いた。
本物を実際見てみると表面の作りはレプリカでも非常に良くできていると感じた。カルサイトの表面は絵の具で言うところのグロスメディウムや樹脂の光沢によく似ていた。
ただやはり、実際の洞窟の湿度や温度の違い、岩肌、大きさについてはレプリカの比ではない。

中でも「熊の回廊」は地下40メートルの場所に位置していてガイドさんが電気を消すと真っ暗になった。「自分たちの車を止めた駐車場がちょうど真上にある」と説明を受け、改めて自分たちが地下にいるということを感じた。



◀ペシュメルル洞窟の外にあるゴミ箱にネガティブハンド模様のゴミ箱を発見。
遊び心があって可愛らしい。

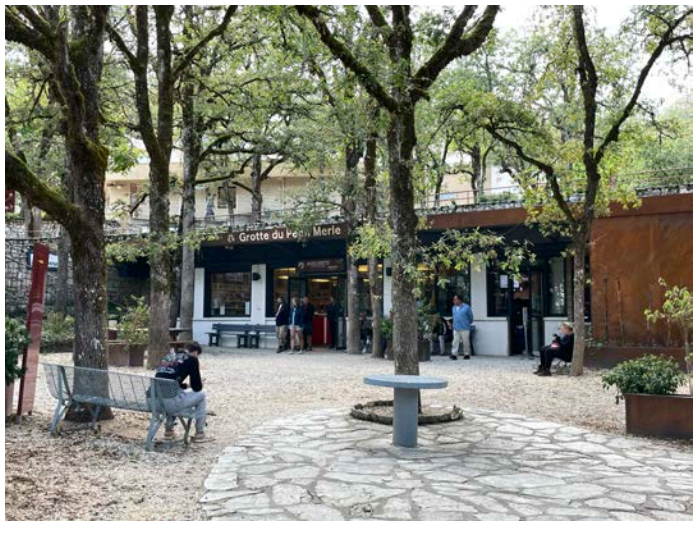
▼併設している博物館



CENTRE de PRÉHISTOIRE
DU PECH MERLE
GROTTE et MUSÉE



▼洞窟関係のグッズなどが売っているショップ
待ち合わせはこの広場。20人ほどで見学する。小さい子供のいる家族連れから老夫婦までいた。

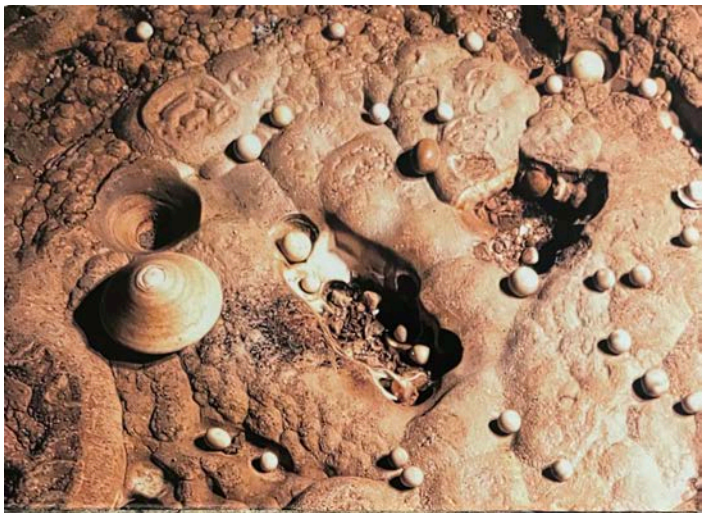




▲ショップの中に突然現れる洞窟への入り口

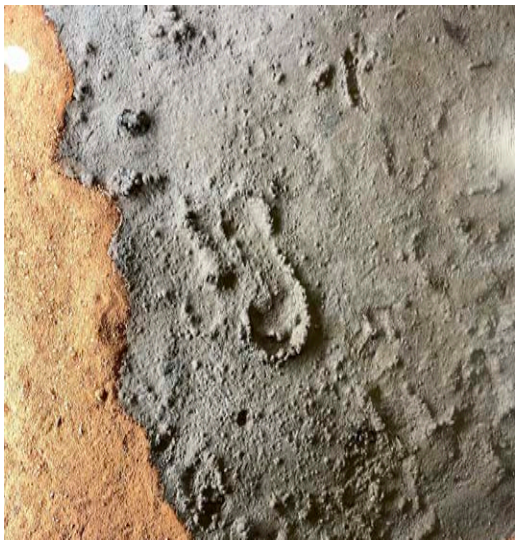


▲口から噴射した絵の具に手を障壁として使いネガティブハンドとして描いている。よく見ると指を折り曲げて別の模様を描いているのがわかる、
また、こちらの壁画は一枚の岩に描かれているが、岩の端の部分が特徴的でそれに合わせて馬の顔を描いている。
このことから、洞窟壁画は平面的ではなく立体的な絵である。と感じた。



▲洞窟の天井から流れ出る水が池の底に渦巻きを発生させ、砂利、砂つぶ、などの小さいものが巻き込まれ、あらゆる方向に回転し始める。こうして方解石が周囲一体に堆積し、水の動きで磨かれる。
これがピソライトと呼ばれる天然池の底部でできた真珠になるようだ。

”水の動きが記憶されているもの”として、とても面白い自然物だと感じた。また、コマのような見た目になっているものに対してもガイドの方が言及しており、日本語訳だとよくわからない日本語になっていたが、縦軸の回転が関係しているらしい。



▲洞窟内部で見ることができる当時の子供の足跡。サイズは21.7センチで先史時代の子供または青年のものと思われる。泥の土壌を裸足で歩いたもので方解石の薄い膜が表面に堆積し保存された。

▼併設している博物館にてみることができる。
赤と黄色の黄土、赤鉄鉱、二酸化マンガン、炭で書かれている。口に含み、吹きつけて描いたり、自作の筆で描く。



▼この付近から数キロ離れた場所で同じ作者が描いたような筆跡の似た絵が見つかっている。
作者は長い距離を移動しながら描いていたのか？という疑問とともに、当時のある意味芸術家であるクロマニョン人たちの絵を描くことに対しての規模の大きさに驚いた。



旅でのハプニング

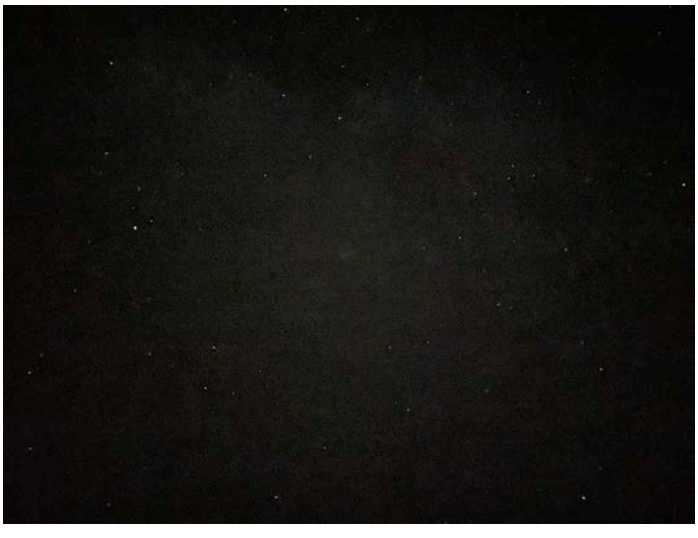
ラスコーIVからの帰り、思いもよらぬハプニングで車が動かなくなった。
借りた車が電気自動車でガソリン車よりもエネルギーの減りが断然早かったのだ。
しかも充電スポットも少ないと来た。数少ない充電スポットへ行くため、高速を降り街灯も店も何もない所で3、40分ほど充電した。
外は9月とはいえ冷えるので車の中にいたが、ふと窓の外に目を向けると見たこともない満点の星空か広がっていた。

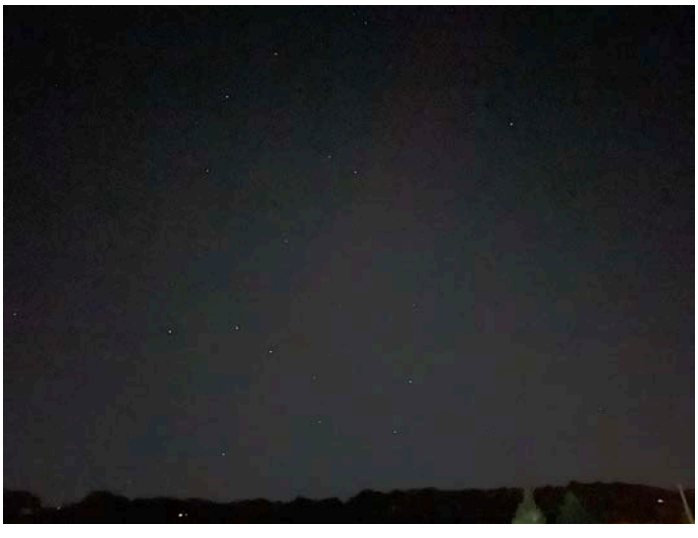
3万年前の電気もない時代、同じようにクロマニョン人もここから空を見上げたのだろうか、とふと考える。

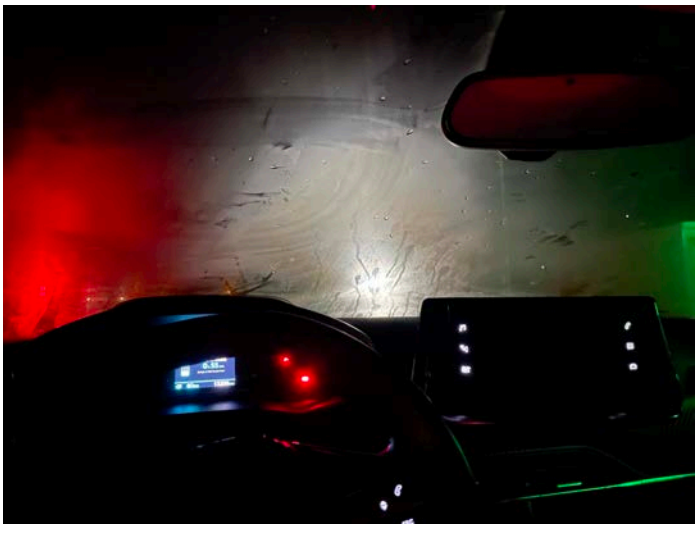
そして、「似ている。」と思った。
実際の洞窟を見て思ったのだが、洞窟の構造上、絵を描く際、上を見上げて描くことが多かったのではないか。

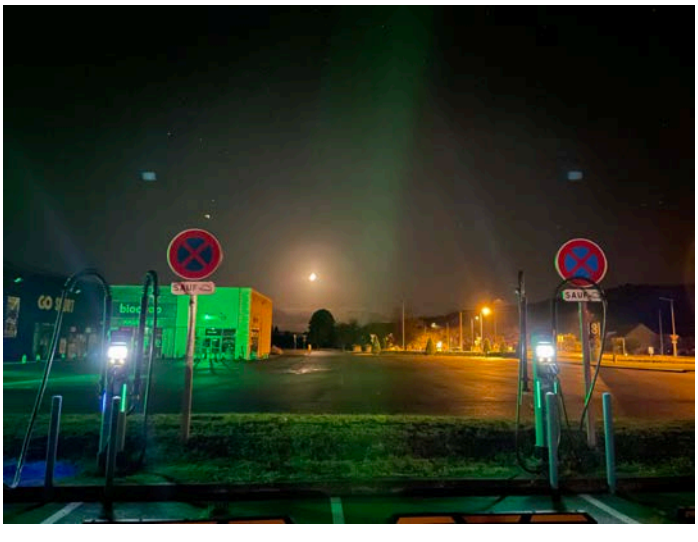
クロマニョン人たちはもしかしたら、空を見上げるように洞窟に絵を描いていたのではないか。という考えが私の頭に浮かんだ。

そんなことを考えながら、ホテルに着いたのが朝の４時ごろになってしまったが、良い経験だったと思う。









今後の計画について

現在制作において思考を続けている中で、自分の描いている絵の地・素材・その技法について気になり始めた。
イタリアのローマを1人で訪れた際、ヴァチカン市国で見たシスティーナ礼拝堂、ラファエロの間を初めて見た。自分の見る絵画と洞窟壁画がその時は結びついていなかったが、実はその絵たちはフレスコという技法で描かれていることを後から知った。

フレスコ画の由来でもある「フレスコ」は、イタリア語で「フレッシュな」という意味の言葉だ。
フレスコ画は、漆喰と石灰の化学変化（消石灰と砂、水を混ぜ顔料を表面に置いていく）を利用して色を壁に載せていきますが、漆喰が乾いてしまうとこの化学変化は発生しない。つまり、漆喰が濡れているフレッシュな間に絵画を仕上げなければならないことから、「フレスコ」という名前がつけられた。
こういったフレスコ画を制作している人にとっては当たり前にある仕組みが油画を描いている私にとっては新鮮に感じた。

私は、蟻の巣の周りに積まれた砂山、雨の度に変化する水たまり、噴射され落下する水滴で作られた噴水の形体など、繰り返し現れその度に変化するものをモチーフとして絵画を制作している。自分の考えているモチーフが”常に動き続けている”という意味では特に関連性を見出している。
そして、そのモチーフをフレスコという技法で描いてみるということに可能性を感じていて、挑戦したい。

今後の計画としては、5月にある展示に向けて現在私の作品制作の新しいキーポイントとなっている洞窟壁画について研究し、トーキョーアーツアンドスペース本郷（https://www.tokyoartsandspace.jp/location/hongo.html）で行われる「TOKAS-Emerging 2024」の個展に向け、新作を作っている。
自分にとって並行して考えているモチーフがいくつかあるので、モチーフと支持体の関係については追求していきたい。

また渡航中に２０箇所ほどの噴水を見た。日本の噴水とヨーロッパの噴水は全く違い、日本の噴水は池の中央にあってただ水を吹き上げるものが多いのに対して、ヨーロッパの噴水は、彫刻、装飾品がが多く施されていて権力の象徴としての役割が強いことに驚いた。
そういった場所によってのものの捉えられ方の違いは多く感じることができたのが今回の旅の発見でもある。
現在、アートインザオフィスで作った噴水を襖絵に印刷するという計画も進んでおり、支持体や、展示される場所により自分の作品がどう変化していくのかを期待して制作を続けている。



バッカーズファンデーションご関係者の皆様、AITの皆様、 この度は大変貴重な機会をいただき、

誠にありがとうございました。

最後に…

試作段階ではありますが現在は土と石膏を使って作品作りを進めています。

